



里地里山再生の手法としての マルチハビテーション

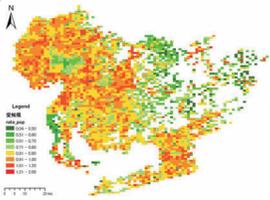
グループ名：里山再生
メンバー：岩田和也・中野勝俊・野崎秀仁・宮本一宏
チューター：伊東英幸、奥岡桂次郎、大川秀樹

現状の把握(課題認識)

里山とは・・・
集落・人里に接しており、農業・林業を中心とした生活が営まれ人が適度に手を加えて維持してきた山

○里山の経済的利用価値の減少
○都市部への人口流出

○里山の荒廃
○生物多様性の衰退



(2000→2030年の愛知県人口推移)
里地エリアでの人口減少・過疎化



(荒れた里山)

2030年に向けての提言の概要

里地里山を有効活用したい(もったいない)
里地里山地域の過疎化対策
里地里山固有の生物多様性の保全

居住スタイルを踏まえた
里地里山再生の提言

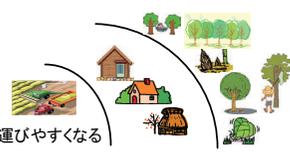
都市部の人々に里地里山を利用する機会を創出

提案の内容

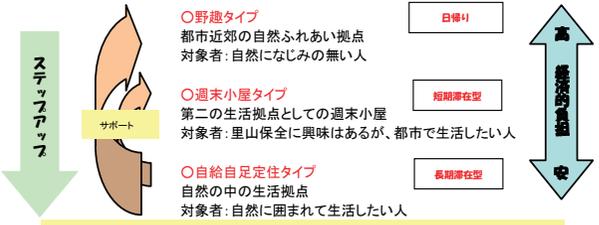
新たな居住スタイルとして週末里地里山居住モデルを提案

○二地域居住の促進

人同士の交流が活発となる
(地域コミュニティの復活)
空き家や耕作放棄地の有効活用
自然との触れ合いの場の提供
滞在人口増による里地里山地域の活性化
拠点を持つことにより、里地里山地域へ足を運びやすくなる



週末里地里山居住モデルとして3つのタイプを想定



※3つのタイプが協働して生活する
(自給自足定住タイプは野趣タイプ等へ、間伐の方法や薪の作り方などの教育といった技術的支援を行う。この際の講師報酬は、野趣タイプ等の小屋や施設の利用料金から支払い、間接的だが自給自足タイプへの経済的支援を行う形となる)

提案実現のための具体的な取り組み(アクションプラン)と実現可能性

○パイロット事業

名古屋圏に近く、万博開催地の瀬戸地域や耕作放棄地の増加が著しい知多半島をモデル地域に選定する。

○入会権整備

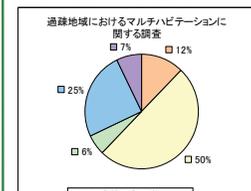
広範囲かつ自由な活動(里山利用)を促すため、入会権の整備をする。具体的には、入会地として利用することについての地主との協定について、地元自治体へ登録する。これにより、里山の売買が行われた際にも、入会権付きであることを承知で買ったこととなるため、入会権が継承され、入会権は保護される。

○二地域居住のインフラ整備

基本的には、廃屋やオートキャンプ場を有効活用する。できるだけ、里地里山資源を活用してもらうようにする。

○実現可能性(心理的)

約68%の人が、田舎暮らしに興味のある。20世帯で100haの里地里山を有効活用すると仮定すると、愛知県では約5,000世帯必要であるが、これは全世帯数の2%に過ぎず、実現可能性は高い。



「二地域居住」の意義とその戦略的支援策の構築
「二地域居住人口研究会」事務局(2005)

○実現可能性(経済的)

小屋建設や電気、水道整備等初期インフラと利用者管理や研修会費等の経費を試算したところ、30年で48.1億円必要であった。これに対し、CO2固定量の減少率と同様に公益的機能の価値が損失すると仮定し、里山林を30年間無管理の場合と、管理した場合の公益的機能の総経済価値額を算出して比較すると、わずか3%の保全で55.6億の損失防止効果が見込まれる結果となった。

(必要経費)

初期投資	経費(億円)
小屋手配、整備	33.6
インフラ整備	4.8
経常費	経費(億円/30年)
管理事務費	10.8
検査事務費	1.08
小屋の貸貸料金(収入)	-2.16
必等経費(億円/30年)	48.12

(里山林の経済価値)

状態	総経済価値額(億円/30年)
放棄(a)	32.025
1%の里山林を保全	32.044
3%の里山林を保全(b)	32.081
(b)-(a)	55.6

波及効果

本政策により、都市住民の自然への興味や理解の促進され、里地里山地域の経済振興や過疎抑制効果が期待できる(短期的効果)。

長期的にかる継続的に実施されることによって、生物多様性の保全や、多様な人材交流による社会構造の革新、文化の継承が期待できる(長期的効果)。

短期的効果

- 滞在人口の増加に伴う里地里山地域の活性化
- 里地里山利用及び生産物活用の促進
- 里山の魅力の発信地(広告塔として活用)

長期的効果

- 里地里山独自の生物多様性の保全
- 時勢に則した農村社会モデルの構築
- 里山文化(共生文化)の継承及び浸透